

## 技術報告集の発刊にあたって

三重大学大学院工学研究科 研究科長 武田 保雄

三重大学工学部・工学研究科技術職員による技術発表会と技術講習会も 15 回を数え、他部局や他大学からの参加も得てますます発展しているのは大変喜ばしく、技術職員の皆さんの絶え間ない努力に敬意を表したいと思います。平成 16 年度から、三重大学も他の国立大学とともに国立大学法人となりました。混乱の時期のつね、事情がよく分からないままに工学部も生き残りをかけて、一期目終了時に高い評価を得るべく、とにかく出来るだけのことをやろうと努力してきました(効果のほどはよくわからないのですが)。この間の技術部の活動は、まさにその努力を十分に分かち合うものでした。技術部の活動がますます広範囲にわたる様になり、その役割も工学部に限らず、大学全体にとっても年々重要になってきましたのは大変頼もしい限りです。

「技術部長として何か前書きを」と技術長の市川さんが依頼してこられたとき、参考にと前学部長の森野先生、加藤先生の 11 回から 14 回の前書き原稿を添えて下さいました。法人化をひかえ新しい教育研究活動の展開や、将来構想を基にした工学部の発展には、技術職員による支援が是非必要でということ、そのためには技術部組織の実質化と技術職員各人の専門職能のブラッシュアップに鋭意取り組んで欲しい、というのが森野先生の希望でした。その後、法人化がスタートし、技術部の新組織化と業務運営の改革を基に「50%全体サービス」が始まりました。工学部技術部は法人化を前向きに捕らえて前進する姿勢を保ち続けてきました。例えば、労働安全衛生法の適用を踏まえ、全学に対しての作業環境測定を工学部技術部が引き受けるべく作業環境測定士の資格を取得したこと、全学組織として作業環境測定室を設置させ、学生を含む職員の安全衛生の確保に多大な貢献をしたこと、定期的な巡視活動による安全衛生の課題認識とその改善ができる体制作りに中心となって関わったことなど、加藤先生は技術職員の活動を大いに評価されています。私も同感で、ほかにもいろいろあるでしょうが、特にこれ以上付け加えることはしません。

18 年 4 月から、工学部はいわゆる重点化を文科省から認められ、教員組織は大学院工学研究科に移ることになりました。19 年度からはその実質化の第一歩として、教育研究体制を少し変更することになります。専攻を横系としますと、縦系として専門に近い教員グループがそれぞれ専攻をまたがった研究分野を形成し、それらが絡まった形でさらに有機的に教育と研究を進めることになります。重点化が認められた事は、三重大学工学研究科も一応は研究大学院としてやっていくことを認めてもらったことになります。ただその後の評価は、当たり前ですが、教職員一人一人の努力と研鑽の「総和」として現れてきます。どんな奇抜な組織改革やプロジェクトを組んでも、結局は個人の当たり前の努力がなければ成功しません。このことは特に教員に当てはまることではありますが、この改革を成功させるには技術職員の皆さん一人一人のご協力が是非とも必要となります。技術部のなお一層の教育研究に対する支援をお願いいたします。

技術職員の皆様への私の希望ですが、お一人お一人、絶えず「前向きな意欲」を持ち続け、目の前の問題に対処して欲しいということです。技術部が組織化され、自己点検・評価のシステムもできあがり、グループ形成も確立して学部・研究科に対するサービス体制も整いました。ただ、それがうまく機能するかどうかは、どんな場合もやはり構成員の前向きな姿勢と進歩しようとする努力にかかっていると言えるでしょう。そのための支援は出来る限り行って行きたいと思います。

最後に、技術部が今後ますます発展されることを期待すると共に、これからも技術部の活動にご協力いただきますよう、工学研究科の教職員各位にお願い申し上げます。

平成 19 年 1 月